



ささき牧場カフェにて。最後にみんなで記念撮影



ささき牧場カフェにて。料理の説明を聞く参加者

「ふくしまの日韓交流を通して」

この度、公益財団法人日韓文化交流基金の事業採択を受け、2月20日から9泊10日間にわたって実施したプログラムは、3月1日に二〇一名が無事帰国し、終了しました。

今回の目的は、福島県の風評被害払拭や農食品の安全性をアピールすることでしたが、目標以上の成果を上げることができたと思っています。これは、この事業の意義を理解して協力してくれた農民連の皆さんのおかげです。ささき牛乳に行ったとき、韓国の方々は口を揃えて「皆さんの復興に寄せる熱意と心の優しさを肌と感じ、感動した。福島のみなさんの笑顔が本当に美しい。」と言ひ、交流会での食の体験では、「日本の料理は美味しい。福島の食品は安全だと確信した。」と感想を持っていました。

会長の1千万袋の米をすべて検査しているというお話聞いて、「検査体制が厳しく実施されており食の安全が確認できた。放射能の影響は原発地区が中心であって限定的であり、いわきや会津地域は安全。福島県多くの地域が安全に普通に生活していることが分かった。韓国の多くの人が福島を誤解している。」といった感想が聞かれました。

最後の報告会では、参加した9班から「福島に来る前は不安だったが、来て見て順調に復興しているのが確認でき、厳しい検査体制を通して安全性が確保されていることがわかった。帰国したら、この発見を福島の人に代わって伝え、広報大使になる。」と言ってくれました。当法人は今後も、両国市民間の草の根の交流を進め、ふくしまと韓国の架け橋の役割を果たせるよう努めます。この度はありがとうございました。

農民連フラッシュflash

地域力を追求する資源エネルギー活用事業導入協議会

2月24日郡山市石筵集会所にて「地域力を追求する資源エネルギー活用事業導入協議会」が開催されました。パイオガス発電事業導入可能性調査の一環で、協議会メンバー11名、地元住民が多数参加しました。食品リサイクルループを地域で完結する事業とするため、活発な意見が出されました。



原発ゼロの未来へ福島とともに 3・4全国集会

原発事故から間もなく6年目を迎える3月4日、日比谷野外音楽堂に全国から3500人が集まりました。国も東電も未だ責任を取らず、事故収束の見通しも立たない中、安倍政権は全国の原発の再稼働を進めています。賠償、避難者打ち切り、帰還しても生活の基盤がないなど将来への不安が大きく原発事故の重大さが改めて浮き彫りになりました。集会後の銀座パレードでは原発ゼロ、再稼働反対を訴えました。



日韓交流

ささき牧場カフェ・産直カフェに

「33 人の韓国の方々」がやってきた。



「過去の不幸な歴史に向き合い、交流を通じ新たな歴史作ってゆきたい」

交流の前に佐々木健三さんからあいさつがありました。通訳者をはじめ多くの方々が涙ぐみ、あいさつが終わると大きな拍手と歓声が沸き起こりました。あいさつの要旨を紹介します。

この地で酪農をはじめて50数年になります。自らのプラントを立ち上げて牛乳を直接消費者に届けています。そして、このカフェも立ち上げました。



ささき牧場カフェオーナー・元農民連会長 佐々木健三さん

全国農民連会長時代韓国の農民の方たちとシアトル、香港とともに農業を守るためにたたかったことがいまも脳裏に焼き付いています。

過去に日本が皆さんの韓国に行った行為、歴史に向き合い、こうした交流を通じて両国の関係が全世界への平和と友好に寄与することを確信しています。



「NPO法人ふくかんねつ」と主催
福島と韓国の架け橋
―農食品文化交流事業開催―

2月22日、ささき牧場カフェに33名の韓国の方々が到着。ハンゲル語で「ようこそいらっしやいました(잘오셨습니다)のプラスターで出迎えました。

今回、来日した方々は、チョンジュ(全州)テグ(大邱)で農業・食品にかかわる仕事についている方たちです。日韓の交流に関心を持ち、SNSなどで発信できる方々で公募によって参加した人たちです。主催した「NPO法人ふくかんねつ」はこの事業を2015年から行い、300名を超える人々を福島に迎えています。

「NPO法人ふくかんねつ」と

は、ゆいまあるがトマトジュースで取引があり、今回の事業への協力を要請されました。

「身土不二」の料理でもなし

県北農民連女性部、ゆいまある、SEEDS、ささき牧場カフェのみなさんが朝から豚汁、おにぎり、イカ人参、漬物、パン、トマトジュース、甘酒、アイスクリームなどを準備「身土不二」の料理でもなししました。

福島県農民連根本敬会長が福島の今を説明し、浜通り農民連の遠藤友幸さんが漁業の現状を話しました。

根本会長は、「この地で農業を営むことは次世代への責任であり、未来の世代からの借り物である農地をきれいにしておくことが使命」だと語りました。遠藤さんは、「まだ、海苔事業の見通しは立たないが、何もしなければ終わってしまいます。一昨年から試験的に栽培を始めています。希望は捨てていません。」と決意を述べました。



産直カフェにて日本の農業と作物に興味津々

NOTE

青年部の活動、地元の農や食のことをリレーで紹介

若き農業者のつぶやきのーと せいねんぶ農人

これが掲載される頃は水稻の播種作業の時期かと思います。我が家でも育苗に向けて、新しいビニールハウスを増設しています。今年から正社員として契約した斧澤さんと一緒に、今年の米作りもがんばろう!

by三浦

